

論
説

ゼークトの中国訪問 一九三三年

ドイツ側の政治過程および中国政治への波紋

田 嶋 信 雄

はじめに

- 一 歴史的諸前提
- 二 ゼークト、「広西プロジェクト」とハンス・クラインの陰謀
- 三 ゼークト、蔣介石と第三代ドイツ軍事顧問団長ゲオルグ・ヴェッツェル
- 四 ゼークトの第一回中国訪問
- 五 ゼークトとヴェッツェルの決裂
- 六 「広東プロジェクト」の成立と、ゼークトの心の闇
おわりに

おわりに

1 問題の設定

一九三三年初夏、「ドイツ国防軍の父」と称された元ドイツ陸軍総司令官ゼークト将軍 (Hans von Seeckt) が、約

二ヶ月間中国を訪問した。当年六七才の老將軍は五月六日に香港に到着後、上海から杭州に遊び、長江を遡上して南京に到着、避暑地である牯嶺へ赴き約二週間滞在、蔣介石と会談を持ち、その後南京から山東經由で北京へ移って三週間を過ごし、南京、上海、広州とめぐり、七月一五日に香港から帰国の途に着いた。

ゼークトの中国訪問は、東アジアの国際政治に微妙な波紋を投げかけた。第一に、ゼークトの中国滞在は、塘沽停戦協定（一九三三年五月三一日）により「滿洲事変」に一応の終止符が打たれた時期を前後していたが、彼を招聘した中国側には明らかに対日デモンストレーションの政治的意図が存在していた。第二に、当該時期は、ドイツでナチスが権力を掌握（一九三三年一月三一日）してから約三ヶ月後のことであり、ナチス・ドイツの新しい極東政策および中国政策との関連が各方面で取り沙汰された。第三に、ゼークトの中国訪問は、中国の中央政府と地方権力、具体的には西南派（国民政府西南政務委員会）および「国民党中央執行委員会西南執行部」との間での政治的・軍事的緊張関係に新たな要因を加えることとなった。第四に、中国訪問中の一九三三年六月にゼークトは蔣介石に宛てて中国軍の再編成に関する覚書を提出し、中国軍の近代化を目指す蔣介石の努力に一定の影響を与えていた。第五に、今次の中国訪問でゼークトの人物と能力を高く評価した蔣介石は、翌一九三四年五月、ゼークトをふたたび中国に招聘し、彼を在華ドイツ軍事顧問団の「総顧問」（一九三四年—一九三五年）として厚遇することになる。ゼークト麾下の在華ドイツ軍事顧問団の主たる任務は、当初は対共産党戦（「圍剿戦」）の遂行であったが、一九三四年一〇月に中国共産党が軍事的敗北、「大西遷」を強いられて以降、軍事顧問団の工作の重点は、徐々に対日戦の準備へと移行することになる。

以上のように、ゼークトの一九三三年中国訪問は、中国・極東という強烈な政治的・軍事的磁場において展開されたドイツの重要な対外行動であったといえることができる。にもかかわらず、今までの研究においてゼークトの訪中は、のちに述べるように、ゼークトの生涯を対象とした伝記的研究の「こま」として描かれてきたに過ぎず、そ

れが当時のドイツ政治および中国政治にいかなる意味を持ったかについては、従来必ずしも十分には検討されてこなかったように思われる。

そこで本稿では、従来の伝記的な研究に学びつつも、①ゼークトの訪中がドイツ側でのいかなる政策決定過程を経て実現したかを分析することにより、極東政策をめぐるナチス・ドイツ初期の政治的諸対抗の一端を明らかにするとともに、②併せてゼークトの訪中が当時の中国政治 とりわけ南京中央政府と西南派との関係 に対して持った意味の一端を明らかにしようとする。その際、分析の枠組としては、①の課題について、筆者がかつて設計した「ナチズム期ドイツ外交の分析枠組」に主として依拠することとした。⁽¹⁾

2 研究史

次に、ここでゼークトの一九三三年中国訪問をめぐる研究史について簡単に触れておきたい。

ゼークトの死（一九三六年二月二七日）後、ドイツでは、残された膨大な「ゼークト文書」（主として日記および書簡）をもとに、軍事史家ラーベナウ（Friedrich von Rabenau）將軍により大部の伝記『ゼークト その生涯』⁽²⁾（一九四〇年）が編集され、ナチス期におけるゼークト研究の金字塔となった。この著作は、第二次世界大戦中に出版されたことによる長所と短所を同時に兼ね備えていたといえよう。長所とは、具体的には多くの同時代人の証言を参考にすることができたことである。しかし短所は長所をはるかに凌駕していた。つまりそれは、ゼークトの生涯の検証ではなく顕彰を目的としたものであったため、ゼークトの活動 とくに彼の中国での活動 の「陰」の側面について、かなりの程度目をふさいだものとなった。また、ナチス体制下での出版であったため、ナチスに都合の悪い部分は大幅に捨象ないし歪曲された。さらに、関係する公的文書の多くがアクセス不可能であったことも、その限界として挙げるべきであろう。そもそも、当のラーベナウ自身が、著作の史料の限界と、ナチ

又統治下にゼークト伝を書くことの政治的制約を明らかに意識しつつ、次のような「不吉」な予言をしていたのである。「ゼークトの中国における活動については、将来、いずれ特別の研究の対象になることもあり得るだろう」⁽³⁾。

第二次世界大戦後のゼークト研究で何よりも注目すべきは、軍事史家マイアー＝ヴェルカー (Hans Meier-Welcker) の大著『ゼークト』⁽⁴⁾ (一九六七年) である。本書は、上記のラーベナウ著の様々な弱点を免れており、管見の限り、いまだに本書を超えるゼークト伝は書かれていない。本稿も、訪中時の事実の確定や手稿の解読の面で、この伝記に依拠するところが少なくない。しかしながら、このマイアー＝ヴェルカー著では、当時刊行途上にあつたドイツ外交文書集 (*Akten zur Deutschen Auswärtigen Politik 1918-1945*, 以下ADAPと略) を含め、ドイツおよびその他の国々の刊行・未刊行の外交文書が一切用いられていないという限界があり、国際政治史研究としての本稿は、残念ながら、マイアー＝ヴェルカーの依拠する史料の基盤に満足することはできない。

右に見たラーベナウおよびマイアー＝ヴェルカーの著作は、しかも、いずれもゼークトの伝記的記述を意図したものであつたため、ゼークトの中国における活動については、その一部で触れられるに過ぎなかつた。また、ラーベナウもマイアー＝ヴェルカーも、中国史・中国問題への理解は必ずしも十分ではなく、中国政治外交史への言及にはしばしば隔靴搔痒のうらみが残らざるを得なかつた。

他方、在華ドイツ軍事顧問団の活動全般については、ライプチヒ大学 (東独) に提出されたメーナー (Karl Meher) の博士論文⁽⁵⁾ (一九六一年)、カリフォルニア大学バークレー校に提出されたセプス (Jerry Bernard Seps) の博士論文⁽⁶⁾ (一九七二年) およびドイツ連邦共和国で出版されたマルティン (Berd Martin) の論文集⁽⁷⁾ (一九八一年) などがあり、こつした著作を通じてその活動の詳細が知られるようになった。とくにマルティン編は、現在までの在華ドイツ軍事顧問団研究の国際的なレヴェルでの到達点を示しているといえよう。ただしそこでも、ゼークトについては、マイアー＝ヴェルカーが前掲著を踏まえた新たな小論を寄稿しているのみで、研究上の前進があつたと

はいえない。

さらに、当事者の手になるものとして、エッケルト (Walter Ecker) の回想録 (発行年記載なし、私家版⁽⁸⁾) があり、その一部でゼークトの第一回訪中にも触れているので、参考になる。

中国では、馬振特・戚如高が、ナチズム期の中独関係に関する著書 (一九九八年) の一部で、中国側の文献に依拠しつつ、『国防軍之父』 駕臨中国』と題してゼークトの中国訪問を描いており、参考になる。⁽⁹⁾

3 史料状況

次に、ゼークトの中国訪問に関する史料状況について触れておきたい。なによりも、ドイツ連邦軍事文書館 (フライブルク) に所蔵されている日記・書簡を始めとする「ゼークト文書」⁽¹⁰⁾ が重要であることはいままでもなかる。さらに、同じく連邦軍事文書館に所蔵されている在華ドイツ軍事顧問団の文書⁽¹¹⁾ のほか、「パウアー文書」⁽¹²⁾、「ファルケンハウゼン文書」⁽¹³⁾ などが在華ドイツ軍事顧問団長を経験した歴代のドイツ軍人の個人文書などにもゼークト関係の文書が散見される。ドイツ外務省外交史料館 (ベルリン) 所蔵の中国関係文書、ドイツ連邦文書館 (ベルリン・リヒターフェルデ) に所蔵されている旧中国駐在ドイツ大使館文書にも在華ドイツ軍事顧問団に関する文書は多い。⁽¹⁵⁾

一方、現在、台湾の国史館 (新店) では、「蔣介石文書」 (いわゆる「大溪档案」) がデジタル・データで公開され、現在その重要部分『事略稿本』が順次刊行されている。ゼークトを始めとする在華ドイツ軍事顧問団に触れたものも散見される。また、台湾の雑誌『伝記文学』、中国の雑誌『民国档案』にもしばしばドイツ軍事顧問団関係の文書・論文が発表されるようになった。

なお、中国における改革開放政策の進展と国際関係における冷戦体制の崩壊にともない、中国、台湾およびドイツで中独関係に関する重要な史料集が刊行されている。⁽¹⁶⁾ しかしながら、これらの史料集は外交文書を中心に編纂さ

れており、在華ドイツ軍事顧問団については、未だにアルヒーフ史料に多くを頼らざるを得ないのが実情である。

一 歴史的諸前提

1 ゼークト略伝

ハンス・フォン・ゼークトは、一八六六年四月二日、北ドイツのシュレスヴィヒで陸軍将校の息子として生まれた。一九才でプロイセン陸軍に入隊、参謀将校としての道を歩み、陸軍大学卒業後、一八九九年に参謀本部入りし、ブランドンブルク第三軍参謀長として第一次世界大戦を迎えた。一九一五年三月以来、マッケンゼン(August von Mackensen)の下で第二軍参謀長を務め、同年五月、ゴルリッツの戦いを勝利に導いた。一九一五年秋、マッケンゼンとともにセルビア遠征で活躍し、一九一六年夏にはオーストリア第七軍参謀長、一九一七年末にはトルコ軍参謀長に就任している。

一九一八年一月の休戦協定締結後、一九一九年四月にパリ講和会議ドイツ代表团に陸軍代表として参加し、ヒンデンブルク(Paul von Hindenburg) 退任後、ドイツ陸軍参謀総長に就任した。

一九一九年一月、ヴェルサイユ条約の制約の下でドイツ国防軍が再編成されると、ゼークトは新設の参謀局長(Chef des Truppenamts) に就任した。参謀本部の設置を禁じられたドイツ国防軍にあって、参謀局は事実上の参謀本部としての機能を果たした。

一九二〇年三月のカップ一揆で国防軍を局外中立に置くことに成功したゼークトは、国防軍内部においてラインハルト(Walther Reinhardt)との権力闘争に勝ち抜き、陸軍総司令官(Chef der Heeresleitung)に就任する。以後、ゼークトは、国内的にはヴェルサイユ条約で許された一〇万軍を将来の拡大国防軍の中核として育成する建軍路線を追求し、他方対外的には、ヴェルサイユ条約の制約を革命ロシアとの提携により突破する政策を展開した。ロシア

との提携では戦車、毒ガス、航空機など近代兵器の実験と改良が重ねられた。

一九三三年一月にはフランス・ベルギー軍がルール地方を占領した。これに端を発する激しい政治危機に直面した大統領エーベルト(Friedrich Ebert)は、一九三三年一月五日、憲法四八条の非常大権規定に従い、ゼークトに執行権力を委ねるに至った。ゼークトは暫定的に一種の軍事独裁を実施する権限を得たのである。これに基づきゼークトは、一方でザクセンやテュービンゲンの左翼革命運動を弾圧したが、他方ヒトラー(Adolf Hitler)、ルーデンドルフ(Rich Ludendorff)らが一月八日に引き起こした「ミュンヘン一揆」(ヒトラー・ルーデンドルフ一揆)に対しては、国防軍の介入による一揆の武力鎮圧を拒否しつつ、同時にまた一揆に同調することをも拒んだのである。これによりヒトラー一派は一揆は政治的に孤立し、敗北を余儀なくされた。

こうしてゼークトは、国防軍を「国家の中の国家」として対外的に遮蔽しつつ、そのヴァイマル共和制への政治的・イデオロギー的統合「共和国化」を阻止することに成功した。

一九二六年にゼークトは国防大臣ゲスラー(Otto Geiser)と対立し、上級大将の身分で退役した。その後は軍事評論家として活動し、ドイツ人民党の代議士となったが(一九三〇年 三三年)、政治的には不遇であった。一九三一年には右翼勢力の統一戦線であるいわゆる「ハルツブルク戦線」に係わった。一九三三年の大統領選において右派の大統領候補と目されたこともあったが、結局ヒンデンブルクの出馬となり、ゼークトの政治的不満は残った。一九三三年一月三〇日のヒトラーの権力掌握を、ゼークトは複雑な思いで迎えたのである。⁽¹⁷⁾

2 南京政府と西南派

一九二八年六月九日、「北伐」軍＝国民革命軍は北京に入城し、中国は一応の統一を達成した。しかし「北伐」軍は決して一枚岩ではなく、蒋介石、閻錫山、馮玉祥、李宗仁の四大派閥の合掌連衡の上に成立したものであった。

一九二九年二月には国民党の指導権を求めて李宗仁ら「桂（広西）系」が反蔣運動を起し、湖南方面に進出したが、「両湖事変」、蔣介石は大小軍閥を糾合して広西派を制圧、李宗仁・白崇禧らは国外に逃亡した。その後、広西政局をめぐる混乱に乗じて広西に戻った李宗仁と白崇禧は、ふたたび広西権力を掌握した。

一九三〇年九月、汪兆銘、閻錫山、馮玉祥、李宗仁らは蔣介石に反旗を翻し、北京に北政権を樹立した。しかし東北軍閥を背景とする張学良が蔣介石支持を表明、一〇月一〇日に蔣介石軍は洛陽に入城して閻錫山ら反蔣軍を撃破した（「中原大戦」）。この勝利後、蔣介石は国民党内の実権を掌握するため「肅軍」に乗り出したが、李宗仁、白崇禧らは広西省の支配権を維持した。

翌一九三一年五月二八日、李宗仁は汪兆銘らとふたたび反蔣連合を結成し、広州にあらたな「国民政府」を樹立した。しかしその後柳条湖事件（九月一八日）をきっかけとして「満洲事変」が勃発すると、中国では国内統一への希求が高まり、一〇月二二日に上海で蔣介石、汪兆銘、胡漢民の三者会談が開催され、同月二七日より一二月七日にわたって南京・広東西政権の和平交渉が行われた。その結果、翌三二年一月一日に蔣介石と汪兆銘の連合政権（「汪蔣合作政権」）が成立し、同五日、広東国民政府は解消された。しかしながらこの妥協の結果、広東派・広西派を中心とした西南派は「国民政府西南政務委員会」および「国民党中央執行委員会西南執行部」を組織し、貴州・雲南などを含めた華南に対する広範な自治を主張した。これにより西南派は、南京中央政府との間で党務・政治・経済・軍事などの各レヴェルを含む「全方位的敵対」（陳紅民）の関係に立つことになったのである。⁽¹⁸⁾

しかしながら西南派は決して一枚岩ではなく、その内部には、あくまで「反蔣」を指す胡漢民、鄒魯、蕭仏成、鄧沢如ら国民党元老派、なによりも地域での権力基盤の維持・拡大を目指す広東派、両者の間で独自の動きを示す広西派の各グループが分立していた。

広東派の領袖は「南粵（広東）王」と称された陳濟棠であった。陳濟棠は、政権基盤を固めるため税制改革（「專

税」導入）や公開入札制度導入による請負改革を試み、いくつかの実績を上げた。さらに、省政府の資本投下により製糖業などを育成して利益を独占、六〇%を超える軍費を含めた省財政の拡大に努めた。⁽¹⁹⁾ こうして捻出された資金により陳済棠は、広東省のインフラ整備に乗り出すとともに、四個師に過ぎなかった陸軍を三個軍に再編成し、広東省空軍を創設するなど、大幅な軍備拡大に乗り出したのである。⁽²⁰⁾

李宗仁、白崇禧らを中心とする広西派は、「半独立」状態の下で、「民団制度」の下に住民を組織し、広西の治安維持に努めるとともに、アヘン販売などを通じて収入を増やし、「建設広西、復興中国」のスローガンの下、さまざまな近代化政策を推進したのである。軍事に関しては、一方で外国製武器の購入に努めるとともに、他方では独自の兵器工場建設の計画を推進し、武器の自給を図った。李宗仁の回想によれば、「われわれの兵器工場の中には、その規格の精密さ、設備の斬新さにおいて、実に中央の各兵器工場を凌駕するものがあった」という。広西派は、軍の中でもとくに空軍の建設を積極的に行った。⁽²¹⁾

西南派内部の力関係は微妙であった。⁽²²⁾ そもそも「両湖事変」に際し陳済棠は蔣介石支持の通電を行っており、その際「広東省主席」であった広西派の陳銘枢を追放して広東における支配的地位を獲得していたのである。したがって、陳済棠の基本的な立場は、胡漢民、汪兆銘ら国民党元老派と蔣介石の間での対立を利用して広東における地位を確保することであった。一九三三年一月に広東系の李濟琛が中心となって樹立した「福建人民政府」に対して、胡漢民や李宗仁はこれに呼応した新たな政府を樹立する動きを示したが、陳済棠は「福建事変が党国の前途にますます危険を与えている」として陳銘枢・李濟琛らを「叛党叛国」と指弾し、南京中央政府による福建への派兵要請は拒否したものの、中立宣言を発したのである。⁽²³⁾

しかしその後も南京中央政府と西南派の対立は継続した。一九三四年七月、蔣介石は日記に「広東が平定されなければ、軍事も整理のしようがない」と記し、武力による西南派の討伐を考えていたのである。⁽²⁴⁾

一九三六年五月九日、西南派元老派の胡漢民が突然脳溢血に襲われて三日後に広州で死去した。蔣介石中央政府はこれをきっかけとして西南派に政治的・軍事的圧力を集中した。追いつめられた西南派は軍事的な冒険に打って出た。彼らは陳濟棠を先頭に「抗日」を掲げて蔣介石に反旗を翻したのである(「両広事変」)。しかしこの試みは蔣介石の硬軟入り混ぜた政治的・軍事的圧力の前に失敗し、広東軍の部隊はつぎつぎに南京に投降した。さらに陳濟棠は下野を宣言して国外に逃亡、広東・広西の南京中央政権への政治的統合が進むことになる。²⁵⁾ 広東・広西はこのような状況の下で一九三七年七月七日を迎える。

二 「ゼークト」、「広西プロジェクト」とハンス・クラインの陰謀

1 一九二〇年代における中国の軍需

第一次世界大戦での敗北によりドイツは、ヴェルサイユ条約の下、兵器の開発および輸出を禁じられることとなった。しかしながら、軍事技術の世界的レヴェルでの発展・競争からの脱落を怖れたドイツ軍部およびドイツ軍需産業は、密かにドイツ本国を離れた世界各地で軍事技術の開発・改良の努力を行っていた。陸軍・空軍技術については主としてソヴィエト・ロシアの地において、²⁶⁾ また海軍技術については主としてスペインおよび日本において、²⁷⁾ 当該国軍部との協力・交流の下、こうした活動が続けられていたのである。

また、そうした努力は、兵器輸出の分野においても密かに行われていた。ヴァイマル共和国期におけるドイツの兵器輸出については、必ずしも詳細は明らかではないが、第三国を経由したドイツの兵器輸出の重要な潜在的対象国の一つとして、長期にわたる内戦「軍閥」抗争に明け暮れ、膨大な兵器需要を有する中国があつたことは確実である。

一九二八年六月の蔣介石による「北伐」の成功と一応の中国統一も、こうした事態に大きな変化をもたらすこと

はなかった。共産党を含む中国の各地方権力者の間で潜在的・顕在的の内戦状態は、すでに見たように依然として継続していたうえ、一九二〇年代後半以降、日本との政治的・軍事的緊張が増大することになったからである。したがって、中国の兵器需要は減少するどころかますます拡大すると考えられた。一九三〇年、ドイツ経済界は大規模な研究調査団を中国に派遣するが、こうした経済的関心の背後には、世界経済恐慌下で縮小するドイツ輸出市場の打開という一般的な意図は当然のことながら、中国の軍事的需要に対するドイツ産業界の個別的な期待も込められていたのである。⁽²⁸⁾

ドイツ製兵器への関心は、他方、中国の側でも確実に存在していた。例えば孫文は、第一次世界大戦から一九二五年の彼の死に至るまで、独自の「中独ソ三国連合」構想の下で、ドイツから兵器を輸入しようとするのみならず、ドイツ軍需産業の支援により中国・広東に兵器工場を設立する計画を実現しようと執拗に努力を重ねていた。⁽²⁹⁾ さらに、こうした父の計画を受け継ぐ形で孫科も、一九二八年夏、伍朝枢・胡漢民とともにドイツを訪問し、孫文の『建国方略』中の「国際共同中国実業発展計画書」に沿った援助をドイツ外務省に要望したのである。⁽³⁰⁾

また、同じ時期、マックス・パウアー (Max Bauer) とともに陳儀らの代表団がドイツを訪問し、ドイツ各界との接触を図るとともに、常設的な顧問団形成のために活動していた。さらに同じ時期、広東派の李濟璫が広州における兵器工場のため、かつての孫文の腹心朱和中をドイツに派遣していたのである。⁽³¹⁾

2 ペルツ中国商会の活動とゼークト

ドイツ製兵器への関心は、もちろん孫文の広東政府や蔣介石の南京政府など中国中央政府だけに見られただけではなく、右に見た李濟璫のように、各地方権力者（「軍閥」）の間にも確実に存在していた。

こうした中国の中央・地方権力のドイツ製兵器需要に吸い寄せられる形で、多くのドイツ人兵器商人が中国各地

で暗躍していた。広州に本拠を置く「ヘルツ中国商会 (Paetz-China-Co)」もその一つであった。

ペルツ中国商会に勤務していたマイアー＝マルダー退役大尉 (Andreas Mayer-Mader) は、長年にわたる中国での経験により、「中国とヨーロッパの兵器貿易への深い洞察」を得るに至った。マイアー＝マルダーによれば、第一次世界大戦後、連合国がドイツから没収したドイツ製兵器は中国にも売却され、「ドイツ製兵器を求めて中国から毎年数百万ドルの資金がヨーロッパに流れている」。しかもドイツ製兵器の信頼度は中国では非常に高い。一方中国は、「六 年間の努力にもかかわらず、戦争に用いうる兵器を組み立てることがいまだにできない」状態にある。こうした判断からマイアー＝マルダーは、「ドイツはここ中国で、ドイツの旗の下に、兵器工場を建設すべきである」と発案するに至ったのである。もちろんこうした発想自体はかつて目新しいものではないが、彼は独自の計画をもって中国当局との様々な交渉を行っていた。⁽³²⁾

一九三一年一月、マイアー＝マルダーはこうした計画を持ってドイツを訪問し、各方面との接触を開始した。その際、彼の重要な相談相手の一人は、ゼークトであった。マイアー＝マルダーによれば、会談においてゼークトは、「ドイツ国民に仕事を確保するため、われわれはあらゆる機会を利用しなければならない」と語っていたのである。しかしながら今回のマイアー＝マルダーの訪独では、計画に關しドイツ側が見積った費用が中国側にとって過大であると考えられたため、計画の前進には至らなかったといわれている。⁽³³⁾

しかしその後マイアー＝マルダーは中国におけるドイツ兵器工場建設計画を諦めなかった。中国に戻ったマイアー＝マルダーは、広州において、彼の計画に關し、今度は中国国民党西南派の有力者である馬君武と多くの協議を持つに至った。馬君武は一九二八年に梧州に創設された広西大学の学長であり、「北蔡南馬」(北の蔡元培、南の馬君武)と称され、西南政務委員会常任委員、広西省政府委員でもあった。こうした会談の中で馬君武は、マイアー＝マルダーに広西訪問を慫慂したのである。馬君武によれば、「中国の偉大な刷新は広西から始まる」というの

であった。⁽³⁴⁾

南寧でマイアー＝マーダーは広西派の有力軍人の一人韋雲淞將軍と面会した。その結果、一九三一年秋に彼は広西派の軍事顧問として迎えられ、同時に南寧の軍校（中央軍事政治学校第一分校）で教鞭をとることとなったのである。彼は、「華南の気候の下で、教室において、またしばしば兵舎の講堂において、一日四時間の講義を行う」という生活を一年半にわたって続けた。他方マイアー＝マーダーは、韋雲淞との度重なる会談の中で、持論である中国におけるドイツ兵器工場の建設計画について説明した。こうした中から、広西にドイツの兵器工場プラントを輸入するという「広西プロジェクト」が広西派とベルツ中国商会の間で成立したのである。この計画に基づき広西派は、馬君武とマイアー＝マーダーの二人を代理人としてベルリンに派遣することに決したのであった。⁽³⁵⁾

3 マイアー＝マーダーの第二回訪独とハンス・クライン

一九三二年六月、マイアー＝マーダーは予備交渉のため馬君武より一足早くドイツに向った。この時の相談相手は、二年前と同様、やはりゼークトであった。六月一日、マイアー＝マーダーはベルリンに到着し、さらに当時ゼークトが滞在していたバイエルンを訪問する。そこでマイアー＝マーダーは、韋雲淞の紹介状と広西プロジェクトの計画書をゼークトに手交したのである。その際ゼークトは、計画の意義を理解し、次のような重要な示唆を行っていた。「私はこの件でベルリンのある人物と連絡を取ろうと思う。私はその人物と協力するつもりである」⁽³⁶⁾。

ゼークトがここでマイアー＝マーダーに紹介した「ある人物」とは、ハンス・クライン(Hans Klein)という、闇の世界に生きる兵器商人であった。一九二一年代にゼークト率いるドイツ国防軍は極秘裏にソヴィエト・ロシアとの軍事協力関係を推進していたが、同じ時期、クラインは国防軍の後援を得たSTAMAG(Stahl- und Maschinen-gesellschaft m. b. M.)と称する商社の社長として独ソ経済関係の分野で暗躍していた。⁽³⁷⁾ゼークトとクラインの結び

ときは、このような独ソ間の秘密の兵器貿易を通じて形成されていた。いずれにせよここにも、中国の軍需に吸い寄せられた兵器商人が登場したのである。しかも、やがて明らかになるように、クラインの兵器貿易分野での経験および政治的・商業的手腕の蓄積は、マイアー・マーダーの比ではなかったといえよう。

しかし、それはともかく、この兵器商人同士の間での対面の中でハンス・クラインは、マイアー・マーダーに對して中国での協力を約束し、次のように抱負を語っていたのである。「ドイツと広西の協力を実現するために、あらゆる努力を傾注すべきである」⁽³⁸⁾。

一九三二年七月一日、こうした予備交渉を受けて馬君武とベルツ中国商会のベルツ (Bertz) 社長がベルリンに到着し、ドイツで本格的な広西プロジェクトの交渉に入ることとなった。七月三日と四日の二日間にわたって重要な会議が開かれ、ドイツ側からはゼークトが、広西派からは馬君武が、ベルツ中国商会からはベルツとマイアー・マーダーが、クライン・グループからはクラインおよび補佐役の退役少佐プロイ (Kurt Proy) が参加した。この話し合いにおいて各参加者は、ゼークトが監督官 (Protektor) として広西軍の組織化とドイツ製近代兵器の配備を引き受けることとし、ベルツ中国商会グループが経済分野を、クライン・グループが国防経済分野を担当することで合意したのである。⁽³⁹⁾

その後クラインは、ゼークトおよびプロイを通じたドイツ国防軍参謀将校の援助により、広西の軍隊五万人のたゆめ、どの程度の兵器と兵器工場が必要かを検討し始めた。クラインの計画によれば、五万人の広西軍は戦時には二万軍に拡大されることになっていた。また、これに続く交渉では、馬君武とマイアー・マーダーの今回のドイツ訪問に対し、ゼークトとクラインが答礼として翌一九三三年一月に広西を訪問する計画が述べられたのである。予定では、ゼークトとクラインの広西訪問後、その成果に基づき、ドイツと広西の協力関係の基盤を探るため、ドイツ政府とりわけドイツ国防軍とクライン・グループの話し合いが本格的に開始されることとされた。⁽⁴⁰⁾ 実際、クライ

ン・グループの背後には、彼らの中国での活動を支援するドイツ陸軍兵器部長トーマス(Georg Thomas)大佐が控えていたことがのちに明らかとなる⁽⁴¹⁾。

こうした交渉を通じてクラインとベルツ中国商会は、広西プロジェクトをドイツの「国益」に沿ったものであると位置付け、次のように自画自賛していたのである。「このプロジェクトは大工業家が莫大な金を稼ごうとして行っているものではない。それはドイツがヨーロッパで復活し、一連のドイツ軍事産業に仕事を与えるための事業となるだろう⁽⁴²⁾」。

4 ハンス・クラインの陰謀

しかしながら、その後、こうした美辞麗句とは裏腹に、クラインは、広西プロジェクトからベルツ中国商会を追いやれんとす工作を猛烈と開始した。一方でクラインは馬君武に対しベルツ中国商会の経営上の難点を指摘し、同商会の仲介では広西プロジェクトが実現困難であることを示唆し始めた。他方でクラインは、自分がゼークトの代理人であり、しかも広西プロジェクトについてシュライヒャー(Kurt Schlicher)国防大臣の完全な了解を得ているとも語ったのである。さらにまた、のちには、馬君武に対し、広西プロジェクトのために準備される最新式秘密兵器の細目を開陳し、プロジェクトに必要な専門知識をすべて提供しようと申し出た。その時クラインは、勝ち誇ったように述べたという。「全ヨーロッパでこの広西プロジェクトを実現できるのは、私だけだ⁽⁴³⁾」。

馬君武は一九三二年八月末にドイツでの交渉を終えて帰国したが、その後もクラインのドイツからの執拗な工作は続いた。すなわちクラインは中国の馬君武に宛てて何通も電報を打ち、ベルツ中国商会は「兵器製造機械を用意できない」し、「そもそも未だに投資家を捜しているような段階だ」と述べて同商会の信用低下を図っていたのである。その際クラインは、次のように付け加えるのを忘れなかった。「もしベルツ中国商会の計画が失敗したら、

私がそれを引き継ぐ用意がある⁽⁴⁴⁾」。

こうしたクラインの主張に影響され、馬君武はペルツ中国商会から徐々に距離を置き始めた。ここにおいてペルツ中国商会は、クラインが自らをプロジェクトから引きずりおろし、「ドイツの国益の損害を顧みることなく個人の利益を計っている」ことによりやく気付いた⁽⁴⁵⁾。しかしそれは遅きに失した。その後ペルツ中国商会は広西派との交渉から事実上排除されてしまったのである。

ペルツ中国商会を放逐した後にクラインは、広西派に対し、割賦ではなく一括して総額二二 万ライヒスマルクの支払いを求め、手数料として一 % (二二 万ライヒスマルク)を請求し、しかもゼークトとクラインの訪中の費用として五万ライヒスマルクを先払いするよう求めたと言われる。こうした難題のため、広西派とクラインの交渉は、結局袋小路に陥ってしまったのである⁽⁴⁶⁾。

5 マイアー＝マーダーの報復

しかしながら、長年温めていた中国における兵器工場建設計画を台無しにされたあげく、広西派との交渉からも追放されたマイアー＝マーダーの怒りは抑えがたいほど激しいものとなった。しかもその怒りはクラインの背後にいと考えられたドイツ国防省にも向けられたのである。「何ゆえに、またどのような権利があつて、我が国の政府は接触を拒否するのか」「兵器工場プロジェクトを失敗させた責任を誰が負うのか」「クライン氏はゼークトの顧問としての立場を悪用したのではないか」。マイアー＝マーダーは、翌一九三三年一月三〇日にナチスが権力を握ったことを奇貨として、同年三月一日、当時権力の絶頂にあつた旧知のナチス突撃隊参謀長エルンスト・レーム(Ernst Röhm)に宛てて長文の手紙を書き、こうした広西をめぐる屈辱に対し、次のように復讐を誓つたのである。「私は自らの存在をかけ、断固として決意している。この問題で誰が責任を負うべきか、ドイツの公衆の前で

明らかにする⁽⁴⁷⁾。マラー＝マラーはレームに、手紙をヒトラーに渡すよう依頼したのである⁽⁴⁸⁾。しかしながらマイアー＝マラーは、クラインやドイツ国防省に非難を集中した時、真の敵を見誤っていたといえよう。なぜなら、彼も薄々は気がついていたように、「ゼークトは完全にクラインと同じ立場に立っていた」(強調原文)からである⁽⁴⁹⁾。クラインの陰謀の背後にはゼークトの支持があった。

なお、マイアー＝マラーが念頭に置いていた広西プロジェクトの政治的・軍事的意味は、なによりも、将来あり得べき日本との戦争への準備であつた。彼はレームに宛てて次のように書き記している。「日本は艦隊によつて揚子江を支配している。このため日本の攻撃に対し、南京中央政府は、どんな手を打つても屈せざるを得なかつた」(一九三二年の第一次上海事変)。しかし将来確実にやつて来る日本との戦争において、広西はほとんど攻略不可能である。「ドイツの旗の下にある広西の兵器工場は、中国とドイツにとつて決定的な重要性を持つてある⁽⁵⁰⁾」。しかしながら第二に、広西プロジェクトは、もし実現されれば、現実的には、蔣介石率いる南京中央政府への政治的・軍事的脅威を意味せざるを得なかつた。なぜなら広西派は、すでに見たように、陳済棠らが率いる広東派などと連合して国民政府西南政務委員会及び国民党中央執行委員会西南執行部を構成し、南京中央政府に対して潜在的には内戦的対峙の關係にあつたからである。

こつして広西プロジェクトは、日中關係および中国政治の強い磁場の中に置かれることとなつたのである。そして、広西プロジェクトの発想は、やがてクライン＝ゼークトの「広東プロジェクト」(後述)の中に引き継がれ、ふたたびドイツおよび中国において極度の政治的混乱を引き起こすこととなる⁽⁵¹⁾。

三 ゼークト、蔣介石と第三代ドイツ軍事顧問団長ゲオルグ・ヴェッツェル

1 ゼークトと中国問題

以上に見たように、ゼークトは、一九三一年一月にマイアー・マードーから中国におけるドイツ兵器工場プラント計画を持ち込まれ、一九三二年夏には、やはりマイアー・マードーから広西におけるドイツ兵器工場建設の具体的な計画について打診を受け、さらに自ら訪中する意図まで語っていた。

しかしながら、ゼークトが中国問題に係わるようになったのは、実はそれよりずっと以前のことであった。たとえば、一九二二年九月から三年五月までドイツに滞在し、元ドイツ外務大臣ヒンツェ (Paul von Hinz) 提督と「中独ソ三国連合」実現のための工作を行っていた孫文の側近朱和中は、広東政府にドイツ人の軍事顧問を招聘するため、当時陸軍総司令官であったゼークトに接近していたのである。⁽⁵¹⁾

さらにまた、一九三〇年代に入ると、ゼークトと中国の接点はいつそう拡大した。一九三一年二月、「満洲事変」の勃発を受けて国際連盟が極東へ調査団を派遣することに決した時、ドイツ外務省は元東京駐在大使ゾルフ (Wilhelm Solf)、元ドイツ領東アフリカ総督シュネー (Heinrich Schnee) およびゼークトの三人に調査団への参加を打診したが、他の二人の候補に加えてゼークトも、調査団に参加する意志があることを表明していた。⁽⁵²⁾ しかも南京の中国中央政府も、蔣介石個人の意志により、国際連盟に対し、ドイツの代表としてはゼークトが望ましいとの考えを伝えていたのである。⁽⁵³⁾ ただし、実際に参加したのは、いうまでもなくシュネーであった。⁽⁵⁴⁾

蔣介石はその後ドイツの大物軍人を中国に招待する計画を懐き続けた。彼は中国国民党親独派の一人と目された朱家驊 (当時国民政府交通部長) と相談し、ゼークトおよびドイツ国防大臣グレーナー (Wilhelm Groener) という二人の軍人に狙いを定めたのである。⁽⁵⁵⁾ すなわち蔣介石は、一九三二年五月一日、ドイツ駐在中国公使劉文島に宛てて電報を送り、グレーナーを中国に招待することができないか検討させ、⁽⁵⁶⁾ さらにまた、七月三一日にも朱家驊に手紙を認め、「グレーナーが来訪できれば甚だ都合であり、五万元の資金を送るので、私人の資格で来訪するようにして欲しい」と述べていたのである。⁽⁵⁷⁾ ただし、事情は明らかではないが、グレーナーは最終的に中国側の訪

中要請を断つて⁽⁵⁸⁾いた。

さらにまた蔣介石は、一九三三年五月下旬、第三代在華ドイツ軍事顧問団長ヴェッツェル (Georg Wetzel) と会谈し、「ゼークトの再軍備事業への関心」を伝えるとともに、「中国の政治的・軍事的・経済的發展への理解を促す」ため、ゼークトの中国訪問旅行を正式に要請したのである。⁽⁵⁹⁾

2 ゼークトの中国訪問決定

この蔣介石直々の要請に対しゼークトは、三二年六月二十八日、ヴェッツェルに手紙を送り、短期の中国訪問を基本的に受け入れると表明したのである。ただしゼークトはその際、(1)ドイツの状況が許すかどうか、(2)自分の健康状態が許すかどうか、(3)訪問時期の問題、(4)「金の問題」、などについて留保を行い、さらに自らの中国訪問を「ジャーナリスト的性質の私的訪問」と位置づけ、今回の訪中の非政治的な性格を強調したのである。⁽⁶⁰⁾

すでに見たように、一九三三年七月一日・二日のベルツ中国商会および馬君武との会談でゼークトは、広西軍の監督官引き受けを受諾し、クラインとともに訪中する意図を表明していた。しかしゼークトは、それより約二週間前に、蔣介石の要請を受けてすでに訪中を決意していたことになる。明らかにゼークトは南京中央政權と広西派の二股をかけたのである。しかもその際に、彼の重要な関心事として「金の問題」に言及していたことは示唆的である。やや先回りして言えば、ゼークトが今回中国訪問を決意した際のもっとも重要な動因は「金」であった。

他方蔣介石の側にも、グレーナーやゼークトらドイツの有力軍人を中国に招聘する動機が複数存在していた。第一の理由は、明らかに日本に対する政治的なデモンストレーションを行うことであったが、第二の動機は当面内密にされていた。それは第三代在華ドイツ軍事顧問団長ヴェッツェルを更迭することであった。当時蔣介石とヴェッツェルの関係は徐々に悪化していたと言われる。ドイツ駐在中国公使館筋の表現によれば、「蔣介石はヨーロッパ

の概念で言えば『騎士的』であり、個人的関係を重視する」が、ヴェッツェルは「余りにプロイセン的」に振る舞いすぎ、東洋人のメンタリティを理解せず、中国内で「多くの敵対関係」に陥っているというのであった。⁽⁶¹⁾ こうした「多くの敵対関係」の中には、国防部長陳儀との不仲も含まれていたと言われている。⁽⁶²⁾

このような事情から蔣介石は、先に述べたグレーナー招聘の試みの際にも、「ヴェッツェル総顧問に知らせる必要はない。彼の同意は必要ない」との冷やかな立場を取っていたのである。⁽⁶³⁾ ヴェッツェルの態度に懲りた蔣介石は、ゼークトを中国への短期旅行に招待することにより、ゼークトの資質及び性格をテストしようとしたわけである。しかもその裏には、このテストに合格した場合、ヴェッツェルに代えてゼークトを在華ドイツ軍事顧問団長として改めて迎えようという密かな意図が存在していた。しかしそれはともかく、蔣介石は、ゼークトの訪中意志表明を踏まえ、受け入れのための準備を開始した。一九三三年一月五日に蔣介石は、ゼークトの訪中準備のため、三万円を用意するよう手配したのである。⁽⁶⁴⁾

3 ゼークトの中国訪問とドイツ外務省

すでに見たように、ゼークトは、一九三二年七月の馬君武およびマイアー・マードーとの会談で、翌一九三三年一月に訪中する考えを伝えていた。しかしながら、中国への出発は三ヶ月ほど遷延することになった。その事情はつまびらかではないが、一九三三年一月三〇日のヒトラー首相指名に至るドイツ国内の政治的激動が影響していたであろうことは容易に推測されよう。ゼークトは、この間いわゆる「ハルツブルク戦線」の結成や大統領選挙立候補のつわさなどに見られるように、水面下で政治的な動きを示していたからである。しかしながら、ヒトラー政権成立により、当面、ゼークトの政治的な登場の可能性は失われた。ゼークトにとっては、失意の中の訪中決断であった。

一九三三年四月三日にゼークトは、自らの中国訪問の意図を伝えるため、ドイツ外務省にノイラート外務大臣 (Constantin Freiherr von Neurath) を訪問した。ゼークトはその際、「今回の訪中を」奨励したのはヴェッツェル氏であり、ゼークト自身は「短期の旅行」に限定するつもりであることを伝えたのである。この時ノイラートは穏やかにゼークトの話を聞く姿勢に終始し、さらに外貨持ち出しについて便宜を図るとの好意まで示していた。⁽⁶⁵⁾

しかしながら、ゼークトの訪中に関するドイツ外務省の態度は、実は複雑であった。そもそも外務省は、ヴェルサイユ条約の制約から、海外でドイツの軍人が活動することに否定的であった。例えば一九三三年八月、孫文が腹心の鄒家彦を通じてドイツ外務省に軍事顧問の派遣と兵器工場建設の計画について打診した時、ドイツ外務省東亜局長クニッピング (Hubert Knipping) は、ヴェルサイユ条約の制約を理由に、軍事面での対中協力構想を拒否していたのである。⁽⁶⁶⁾ さらにまた、一九三〇年二月に中国国民政府は、第二代在華ドイツ軍事顧問団長クリーベル (Her-mann von Kriebel) に代えて、ヴェッツェル (元ドイツ国防省軍務局長) を第三代在華ドイツ軍事顧問団長として招聘したが、ドイツ外務省は、中国が内戦状態にあるとの理由をも加え、それを甚だ遺憾としたのである。⁽⁶⁷⁾ 当時ドイツ外務省は中国駐在ドイツ公使館に対し、「ヴェッツェルの出国を阻止する手立てはない」が、「適切な方法で中国政府に働きかけ、ヴェッツェルを断念させ、これ以上ドイツ人の雇用を止めさせるよう」指示したのである。⁽⁶⁸⁾ ただし、この警告には何等の効果もなく、ヴェッツェルは外務省の懸念をまったく無視する形で中国に着任していた。一九三三年末にヴェッツェルが副官とともに北京に赴き張学良軍の下で活動し始めると、ドイツ外務省の懸念は頂点に達した。二月一〇日、外務省は国防省に連絡し、「中国におけるドイツ退役将校の活動がもたらす政治的不利益と危険性について、すでに今まで幾度も指摘してきた筈だ」と強く抗議していたのである。⁽⁶⁹⁾ しかもこうした警告を中国現地で間接的に聞き及んだヴェッツェルは、「どこで中国軍の訓練をしようとする自由だ」とした上で、「外務省は誤った立場で大騒ぎをしている」と言い放ち、警告をまったく無視する姿勢を示していたのである。⁽⁷⁰⁾

ドイツ外務省は、当然の事ながら、ゼークトの訪中を、こうした在华ドイツ軍事顧問団の活動との関連で見守っていた。なぜなら、外務省の判断では、ゼークトは「短期の旅行」を強調していたとはいえ、在华ドイツ軍事顧問団の活動に大いに関心を寄せていると考えられたからである。外務省は、「おそらくゼークトは短い極東旅行を中断」し、現地で中国軍の再編成の仕事を引き受けるだろうとの不吉な予想さえしていたのである。⁽⁷¹⁾

四 ゼークトの第一回中国訪問

1 ゼークトの内的葛藤

一九三三年四月一五日、ゼークトはマルセイユを出発し、同行したプロイ（ハンス・クラインの補佐役）とともに極東への旅の人となった。⁽⁷²⁾ しかし長い船旅はゼークトに多くの思索を促した。翌一六日にゼークトは「華南問題」をプロイと検討し、それに関わる書類をめぐった。先回りして述べると、ここで「華南問題」とは、陳済棠率いる広東派と交渉し、ドイツ兵器工場を広東に建設するというクラインの計画を意味していた。クラインは、広西派との交渉の中断ののち、今度は広東派との兵器工場建設計画、すなわち「広東プロジェクト」を構想するに至ったのである。ゼークトの付き人役であったプロイは、香港に到着したあと、ゼークトの南京国民政府訪問には同行せず、広州に赴いてもっぱら広東派と交渉する役割を担うことになる。クラインとゼークトの計画は、こうして、明らかに広東派と南京中央政府の二股をかけるものに他ならなかった。

この「背信」は、ゼークトの内心に葛藤をもたらすに十分であった。彼は日記に書いている。「全事態は私にとってはなお五里霧中、幻想なしに眺めなければならぬ」。⁽⁷³⁾ さらに四月二二日には、今回の中国訪問について次のように述べている。「私は今、中国の国防力につき諮問しに行く途上にある。この道は誤っていないかったか？ この疑問は私を一年間悩ませたものだ。そしてそれは訪中への決断によって終わるべき疑問であったのだが」。⁽⁷⁴⁾ ゼーク

トは中国での活動に關し、深い懷疑に包まれていたのである。

一九三三年五月六日、ゼークトを乗せた「コンテ・ヴェルデ」(Conte Verde)号は靜かに香港に入港した。船上に挨拶に來たのは広東派・広西派の代表や、蔣介石とヴェッツェルがドイツ軍事顧問団の中から派遣したハインツ退役大佐(Heinz)、クラインの広州駐在代表エツケルト(Walter Ecker)らであった。ドイツからゼークトに同行して來たプロイは付き人役をハインツと交替し、エツケルトとともに予定通り広東派との交渉のため広州へと向かったのである。⁽⁷⁵⁾

プロイは広州で、エツケルトの仲介により旧知の馬君武と連絡を取った。さらにプロイはエツケルトと長時間協議を持ち、中国の一般情勢や広東派と広西派の關係につき情報収集を行ったのである。その際プロイはエツケルトに対し、クラインの広東・広西におけるプロジェクトの詳細について説明した。しかも、後続の船でゼークトおよびプロイを追っていたクライン自身がその間密かに広州に現れ、プロイ、エツケルトと共に広東派との兵器工場契約交渉に入ることとなる。⁽⁷⁶⁾しかも、この「広東プロジェクト」には広西派も合流したことがのちに明らかとなる⁽⁷⁷⁾。

一方ゼークトは香港からそのままハインツと船旅を続けたが、広東派と広西派の關係に対し、さまざまに思いをめぐらせ、次のように記している。「華南諸省の内部では深い対立があるように思われる。つまり、貧困にあえいでいるにもかかわらずエネルギーシユな広西が、豊かな広東と陳済棠の政府に対して支配を行っている⁽⁷⁸⁾」。西南の政治情勢および軍事情勢はゼークトにとって重要な関心の対象であった。

さらに上海に向かうゼークトの日記には、以下のような注目すべき記述があった。「私は静謐を得たいと考え、中国に來た。何という皮肉であろう。それはすべて基本的には金のためだけなのだ。私はここで何をなすべきなのか⁽⁷⁹⁾」。ゼークトはここでふたたび、今回の旅行を決断した主要な理由が「金」であることを告白している。しかも、先回りして言えば、贅沢で有名なゼークト夫人ドロテー(Dorothee von Seckt)の要求する多額の金銭こそが、ゼー

クトを中国訪問に駆り立てた主たる動因なのであった。ゼークトは、蔣介石政権が提示する高額の報酬に目が眩んだのである。こうして、船旅でのゼークトの気分は滅々たるものとなっていた。

2 蔣介石・ゼークト会談

五月八日、ゼークトは上海に到着した。上海では国民党政府交通部長で国民党親独派の実力者と目されていた朱家驊が直々にゼークトを迎えた。⁽⁸⁰⁾ 上海からゼークトは、ドイツ軍事顧問団の将校や中国人高官に伴われ、貴賓列車に乗って杭州への二日間のエクスカーションに出かけている。ふたたび上海へ戻ったゼークトは、蔣介石が用意した中国海軍の軍艦に乗船し長江を遡上、中華民国の首都南京に到着した。南京でゼークトは、北京で活動していたヴェッツェルの留守宅に住み、ヴェッツェル夫人のもてなしを受け、さらに汪兆銘ら南京政府高官との会談やさまざまなパーティーに臨んだのである。⁽⁸¹⁾

こうした首都南京でのゼークトの歓迎ぶりは、ドイツ外務省を困惑させた。五月一二日、外務省は北京駐在のトラウトマン公使 (Oskar Trautmann) に電報を送り、ゼークトに帰路日本を訪問させるべく働きかけるよう指示した。つまり外務省は、ゼークトの日本訪問を実現することにより、日本に対し政治的配慮を示そうとしたのである。⁽⁸²⁾ しかしこの提案は、ゼークトの拒否にあった。トラウトマンも公平に判断していたように、この拒否の理由には、中国に加え、さらに暑い夏の日本を訪問することへの健康管理上の躊躇があったのであろうが、しかし何よりも、日本訪問は「中国当局の不快を引き起こしかねない」という政治的考慮がゼークトの判断において大きな役割を演じたと言わなければならない。⁽⁸³⁾

五月二二日、ゼークトは朱家驊に伴われ、軍艦に乗ってさらに長江を遡上、避暑地である牯嶺に向かった。⁽⁸⁴⁾ 蔣介石はこの長旅に、同済大学学長の翁之龍教授をわざわざ上海から呼び寄せ、医師として同伴させるほどの気配りを

見せた。⁽⁸⁵⁾ 当時共産党に対する軍事行動（「囲剿戦」）のため前線で指揮をとっていた蔣介石に代わり、宋美齡がゼークトの接待役を演じた。

五月二八日、前線から戻った蔣介石とゼークトとの間で、ようやく初めての会談が行われた。⁽⁸⁶⁾ この会談は三時間にも及んだといわれている。ゼークトは日記に「司令官（蔣介石）」との初めての面会。情勢と組織に関する一般的な話し合い」と記している。のちにゼークト自身がトラウトマン公使に語ったところによれば、蔣介石・宋美齡夫妻はゼークトに「大きな印象を残した」という（宋美齡については、日記で「夫よりはるかに優る」と記している。⁽⁸⁷⁾）他方蔣介石もゼークトを高く評価した。六月四日、蔣介石は朱家驊を通じ、「閣下の旅行への深い感謝のしるし」として、すでに支払われている三万ライヒスマルクとは別に、一万ライヒスマルクをゼークトに贈り、加えて二品目にもおよぶ土産を持たせたのである。⁽⁸⁸⁾ さらに六月十五日、蔣介石は、南昌行営からわざわざ北京の何応欽に電報を送り、ゼークトを「優待厚遇」せよ、と指示していた。⁽⁸⁹⁾ こうしてゼークトは蔣介石のテストに合格したのである。

3 ゼークトの北京滞在と蔣介石宛覚書

牯嶺に約二週間滞在した後、五月三一日、ゼークトはハインツおよび朱家驊に伴われてふたたび南京へ戻り、そこで約一週間滞在した。南京では、三月までモスクワ駐在武官であったケストリング少将 (Ernst A. Kesting) と数日話し込んだ。ケストリングは、モスクワからの帰路、世界旅行の途中で南京を訪れていたのである。また、六月二日にゼークトは考試院長戴季陶を訪問している。その後ゼークトは朱家驊と立ち入った会談を持ち、朱家驊からヴェッツェルに対する蔣介石及び中国政府の不满を打ち明けられた。これはのちに重要な意味を持つこととなる。さらにゼークトは、北京から南京に戻ったヴェッツェル自身とようやく話し合いの機会を持つことができた。⁽⁹⁰⁾

しかしこの会談は、やがてゼークトとヴェッツェルの人間的関係の決裂へと導くものとなる。

六月六日、ゼークトは南京をあとにし、貴賓列車で北京へ向かった。途中山東の泰安で下車し、かこに乗って泰山への六時間のエクスカージョンを楽しんだ。さらに翌日自動車で曲阜へ向かい、孔廟を訪れている。六月九日、ゼークトはようやく北京に到着した。⁽⁹¹⁾

北京でのゼークトのおもな行動は、観光であった。そしてここでもトラウトマン公使はゼークト訪問の政治的意味をできるだけ薄めるため、さまざまな手を尽くしていた。すなわち彼はゼークトをわざわざ北京の外交団および北京駐在の各国武官に引き合わせるとともに、ゼークトの旅行を「慰安旅行」と紹介していたのである。⁽⁹²⁾ しかしながら、このようなトラウトマンの思惑にもかかわらずゼークトは、北京に駐屯している中国軍部隊の視察を行い、さらに軍政部長何応欽、行政院駐平政務整理委員会委員長黄郛、外交部常務次長劉崇傑などの中国高官とも会談の機会を持ったのである。数多い訪問者の中には、スウェーデンの親独的冒険家スヴェン・ヘディン (Sven Hedin) の姿もあつた。⁽⁹³⁾

こうして「偉大な北京」⁽⁹⁴⁾での生活を堪能するなかでゼークトは、蔣介石の依頼に応じ、中国軍の再編成に関する覚書を記していた。⁽⁹⁵⁾ その覚書は以下のような内容であった。

まずゼークトは、大規模な軍隊を性急に建設するのではなく、何よりも小規模ながら良く訓練され、良い装備を与えられた軍隊を創出することに労力を集中すべきであると強く主張する。中国には軍人が少なすぎるのではなく、多すぎる。軍閥的軍人が相互に対抗しながら活動しており、彼らの下にある膨大な兵員を訓練するのは不可能である。

さらに、指揮系統の扱いや将校団の地位に関しても改善する必要がある。政治権力は蔣介石の指揮の下にある軍隊にのみ基礎づけられる。将校の任用も、個々の師団の將軍たちに委ねられてはならず、全国に適用される統一的

な原則に基づいて、かつ個々の將軍の利害にかかわらず断固として行われなければならない。最上位の基本原理は國家の利益でなければならない。「滿洲事変」の際のように、國家機關が同時並行的に行動するといふようなことがあつては決してならない。

こつした欠点を有効に除去するため、ゼークトは「教導旅 (Lehrtruppe)」の創設を提案する。しかも教導旅は、軍隊を直接訓練するためというよりは、軍の中上級機關で任務に就いている將校たちに対し持續的な教育を与えるべきである。そつした教育は、いままでの教育の欠点を克服することに役立つとともに、現在南京でドイツ軍事顧問團の下で育つてゐる若手將校の能力の向上にも良い影響を与えるであらう。

こつした教導旅は、二個歩兵連隊、一個砲兵部隊、一個工兵中隊、一個戰車中隊、一個通信中隊、一個騎兵中隊から構成されるべきであり、しかも教導旅には経験を積んだ上級將校からなる顧問團本部を設置するとともに、教育目的のため、一定数の若い將校を配置するべきである。

もちろん教導旅には質的に高度な兵器を十分に供給しなければならない。いままでの國産の兵器は、大部分が不満足なもので、さしあたり兵器は外國から輸入すべきであるが、できれば独自の兵器工場を中國に建設するべきである。ヨーロッパの兵器会社に計画を立てさせた上でこつした兵器工場を建設することが合理的であらう。兵器と弾薬を輸入することは、結局は高価につくばかりか、危険でさえあり得る。

現在中國で活動してゐるドイツ軍事顧問團は獻身的に任務をこなしているが、その人数と活動範圍は十分ではなく、實際に必要なことが達成されてゐない。したがつて、ドイツ軍事顧問團の再編成が必要であらう。⁹⁶

ゼークトは、以上のような内容の覚書を、ハインツおよび國民政府交通部長朱家驊を經由して蔣介石に提出したのである。

五 ゼークトとヴェッツェルの決裂

1 ゼークトのヴェッツェル批判(一) 中国事情への無理解

蔣介石宛の覚書を起草したあと、ゼークトの頭を悩ませたのは、朱家驊から報告された中国国民政府、とりわけ蔣介石本人のヴェッツェルへの不満であった。覚書起草後、ゼークトはしばしの熟慮ののち、一九三三年六月三〇日、「いかなるディスカッションも持ちたくない」との理由のもと、ヴェッツェル宛に長い手紙を書くことに意を決したのである。⁽⁹⁷⁾ しかもゼークトはそこに、書き上げたばかりの蔣介石宛覚書を添付していた。

ゼークトはまず、ヴェッツェルが今回の中国訪問を斡旋してくれたことに対して、また何よりも南京の自宅を旅舎に提供し、ヴェッツェル夫人が心からのもてなしをしてくれたことについて、丁寧に感謝の意を述べた。

しかしながら、南京でヴェッツェルと中国情勢に関して会談した時に、「貴下が私のコメントと見解を好んで受け入れていないという印象」を得たという。そこでゼークトは「第三者の見解というのも独自の価値がある」と断った上で、手紙で印象を記すことにした、と述べる。

ゼークトは手紙を書くに至った動機について、「それは貴下の人物と貴下の成果に関する。また、ドイツの利益とドイツ将校〔軍事顧問団〕の成果に関する」と率直に切り出す。ゼークトは、ヴェッツェルとの意見の相違を前提とした上で、「もし貴下と私の見解の相違が生じたとしても、それは避けられない。私はそれが大きくないことを願う」と、非常に慎重に言葉を選んで手紙を進めた。

ゼークトの意見の第一は、ヴェッツェルの仕事上の人間関係、とりわけ中国人将校達に対する態度に関してであった。「貴下も承知しているように、貴下は非常に多くの敵を作ってしまった」。ゼークトによれば、その背景の一つは「貴下の仕事に対する過度の熱意」であった。「もっと慎重で、もっと政治的であり得たのではないか」とい

うのがゼークトの判断であった。「中国事情や中国人に対する貴下の判断や、中国人・ドイツ人に対する愛想の悪さと不用心さに関する苦言が私に伝えられている」というのである。

ゼークトによれば、軍事問題に関するヴェッツェルの判断の内容は正しい。「私は貴下の判断の正しさを疑わない」。たしかに中国人はしばしば狡猾である。しかしそれに対しゼークトは次のように提言する。「アジア的狡猾さに対し、同様の手練手管をもって報いる方がよいのではないか」。ヴェッツェルがたびたび中国側の軍事能力について批判的・悲観的なことを述べることも、中国側の不満の原因であった。ゼークトは述べる。「貴下がしばしば中国情勢に対する悲観を白日の下に晒すことに関しても、私に苦情が提出されている」⁽⁹⁸⁾。

2 ゼークトのヴェッツェル批判(二) 執務態度への批判

ゼークトの批判の第二のポイントは、第一の点と密接に関連するが、ヴェッツェルの執務態度に関してであった。ゼークトは「貴下は、私の考えでは、あまりに多くのことを自分一人で行おうとしている」と、ヴェッツェルを批判する。しかもゼークトによれば、「貴下は仕事でしばしば留守をしている」ので、軍事顧問本部が混乱している⁽⁹⁹⁾。

ヴェッツェル自身は、留守にする時、ブーゼキスト(Urich von Busseke)なる商人を重用していた。しかしそのことがさらに軍事顧問団の混乱に拍車をかけていたようである。ゼークトはこの点を批判する。「貴下は彼(ブーゼキスト)を軍事問題にも重用している」が、ブーゼキストに関しては「中国人将校からも『軍事的知識がない』と批判されている」⁽⁹⁹⁾。こうした状態を克服するため、ゼークトはヴェッツェルに「優秀な幕僚部」を作るよう提案している。

ゼークトは、蒋介石自身からも、優秀なドイツ人幕僚が欲しいという「同様の注文」を聞いていた。ヴェッツェ

ルはしばしば前線に出て作戦指導にも口を出していたようだが、ゼークトによれば、「蔣介石は戦争指導ではなく軍の再編成の面でドイツ軍事顧問の援助を期待している」というのである。ゼークトは続ける。「蔣介石は貴下から独立した軍事顧問を欲している」。

ゼークトにこのように述べた際、蔣介石の念頭にあったのは、もちろんゼークト自身であつたらう。逆に言えば、ヴェッツェルは、これをゼークトの野望と理解したに違いない。それは以下のゼークトの言葉からも明らかである。「蔣介石はその人物を推薦してくれと私に要求したが、私は断つた。推薦するのは貴下の仕事だ」。

ゼークトはヴェッツェルに対し、「独立した軍事顧問」として、ゼークトの中国旅行に同行していたハインツを推薦する。ゼークトによれば、「彼なら蔣介石夫人(宋美齡)ともうまくゆくだろう」というのであつた。⁽¹⁰⁾

3 ゼークトのヴェッツェル批判(三) 軍事問題

ゼークトのヴェッツェル批判の第三点は、軍事顧問団の組織問題であつた。ゼークトによれば、軍事顧問団には「義勇兵的性格」があり、「業務上の上下関係が明確ではない」。しかもゼークトの判断によれば、ドイツ国防省も同様の不満を抱いていた。なぜなら、在華ドイツ軍事顧問団とドイツ国防省の連絡役であるプリンクマン(Rolf Brinkmann)もゼークトに「ヴェッツェルへの苦情」を述べていたからである。

ゼークトはこの点について次のようにヴェッツェルに打ち明けている。「彼(プリンクマン)は適切な人物を探するため国防省と協力しなければならないが、国防省はいささか不快感を持っている。というも貴下(ヴェッツェル)の側から情報という形で対価が払われていないからである。そのため彼(プリンクマン)は、中国情勢に関する資料を送るよう貴下に緊急に要求している」。しかもゼークトによれば、駐華ドイツ公使館・トラウトマン公使も同様の情報開示要求を表明しているというのであつた。

中国人将校を教育する方法についてもゼークトはヴェッツェルに意見を述べる。ゼークトによれば、「陸軍大学」よりも「教導旅」を設立する方が効果的である。さらにゼークトは、「軍需産業の育成には、私企業を導入せよ」とヴェッツェルに提案する。

ゼークトによれば、蔣介石は、こうした面でもゼークトに次のように要望したという。「ドイツで軍事行政、国防政策および会計監査にふさわしい人物を紹介して欲しい」。こうした蔣介石の要望について、ゼークトはヴェッツェルに次のように述べる。「これを私が実行しうるかは分からない。私は貴下の仕事に介入したくない」。

ゼークトは、手紙の中で次のように書いていた。「貴下はこの手紙を無視してもよいし、返答しなくても結構だ⁽¹⁰⁾」。明らかにゼークトは、以上のような内容を持つ手紙を、ヴェッツェルの不興を買つことを承知で認めたのである。

六 「広東プロジェクト」の成立と、ゼークトの心の闇

1 広東兵器工場建設契約の成立

ヴェッツェル宛の長い手紙を書いた翌日の七月一日午後、ゼークトはふたたび貴賓列車に乗って北京を出発し、南京にしばし立ち寄り、さらに上海へと向かった。南京でゼークトは、駅頭まで見送りに来たヴェッツェルに、北京での最後の日に書きあげた手紙を自ら手渡した。それは実質上、ゼークトとヴェッツェルの人間的決裂の瞬間であった。駅頭での別れののちに手紙を読んだヴェッツェルは、ゼークトへの怒りを爆発させることになる。

七月三日午後、ゼークトは上海に到着し、二日間を過ごし、朱家驊から蔣介石の用意したさまざま土産を受け取るとともに、ちようと上海に滞在していた宋美齢とも面会した。七月六日午前、朱家驊に見送られ、ゼークトは上海からマカオ経由香港へと向かった。香港でゼークトは、広州から迎えに来たクライン、プロイ、エツケルトや陳濟棠の代理人らに迎えられた。七月一日、彼は「不承不承、だがクライン・プロジェクトを促進するため」、

広東派の用意した貴賓列車で広州へ向かったのである。広州駅では李宗仁の代理人として張任民将軍らが出迎えた。その後、ゼークト、クライン、プロイ、エッケルトらは、広東派の陳濟棠や広西派の李宗仁が開催したレセプションに出席し、さらに広州のドイツ人クラブで開催されたドイツ人コロニーの午餐会やドイツ総領事ヴァーグナー (Wilhelm Wanger) 公邸での夕食会に参加した。⁽¹⁰²⁾

七月一三日、あらかじめクラインらによる秘密の予備交渉によって準備されていた草案に従い、クラインと陳濟棠・李宗仁との間で兵器工場を広東に建設する合意が成立したのである。こうして広東プロジェクトは広東派と広西派の合同の事業となった。翌七月一四日、ゼークトは、広東派より謝礼として八三〇〇ライヒスマルクを受け取った。こうした基本合意を受け、七月二〇日、陳濟棠の代理人繆培南および李宗仁の代理人張任民とハンス・クラインの間で正式契約が調印されたのである。

契約は、広東省清遠県琶江口の南に以下の如き兵器工場を建設するというものであった。(1)大砲工場(一八五万香港ドル)、(2)砲弾・信管・薬莖工場(一〇七万五千香港ドル)、(3)毒ガス工場(四九万香港ドル)、(4)防毒マスク工場(六万五千香港ドル)。その他の費用を含め、契約総額は約五五〇万香港ドルに上った。さらに、こうした契約内容に関し、広東銀行および広西銀行が西南派の保証を引き受けたのである。⁽¹⁰³⁾

工場は二年後の一九三五年に完成する。一万六千平米の敷地を有し、三四〇台の機器設備を誇る工場は、同年一月、正式に「広東第二兵器製造廠」(通称「琶江兵器廠」と命名され、生産を開始することになる。⁽¹⁰⁴⁾

2 ドイツ外務省の「広東プロジェクト」批判

調印から約一〇日後の八月一日、クラインは広州駐在ヴァーグナー領事を訪れ、西南派と締結した契約の内容の概要を説明した。これに対しヴァーグナーは、(1)南京政府はそれを敵対的行動と判断するだろう、(2)ドイツが日

本、イギリス、フランスと重大な紛争に陥る危険がある、(3) 財政的リスクを負えるのか、との三点での批判を行ったのである。

この①の点に関しクラインは、「南京には根回ししてある」し、「南京と広東の権力者の間では秘密の合意がある」ので「心配の必要はない」と答えた。また②については、「リスクはドイツの関係当局によって慎重に衡量されている」し、「他の国々は別の問題で忙殺されているので危険はさほど大きくない」と述べた。さらに③についてクラインは、「非常に有利な支払い条件」を確保し、銀行の保証も得たので心配はない、との姿勢を示した。ヴァーグナーはこれに対し「反乱、クーデターなどが起こったら、いったいそんな保証など何の役に立つのか」との正当な疑問を呈したのである。クラインは、当時のドイツ政府の輸出振興策である「帝国欠損保障」(Reichsgarantie)を申請することもあり得る、と述べた。

さらにヴァーグナーが「兵器輸出に関するドイツ法に違反するのではないか」と疑問を呈すると、クラインは「兵器の輸出ではなく、製造機械の輸出だから、ヴェルサイユ条約によっても許されている」と述べたのである。これに対しヴァーグナーは、「兵器製造機械が輸出されるのは明白」であるから、「帝国欠損保障はまったく考えられない」との姿勢を示したのである。

しかしヴァーグナーの一番の疑問は、なによりも、「いったいプロジェクトがいかに成立したのか、ドイツの誰がプロジェクトの主なのか、皆目分からぬ」点にあった。クラインが「本国の高い地位の機関」の関与を示唆していたからである。やや先回りして述べれば、このクラインのプロジェクトの背後には、国防大臣フロムベルク(Werner von Blomberg)、「国防省軍務局長ライヒエナウ(Walther von Reichenau)」、陸軍兵器部長(のち国防省国防経済幕僚部長)トーマスらドイツ国防省首脳の強い支持があったのである。

さて、広州のヴァーグナーからこの報告を受け取った北京駐在ドイツ公使トラウトマンは、八月二四日、報告を

ベルリンの外務省に転送するとともに、次のような意見を付け加えたのである。「広東政府と中央政府との関係は非常に不安定なので、このような契約を締結することには重大な疑念を呈せざるを得ない」⁽¹⁰⁵⁾。

3 ゼークトの心の闇

西南派との間で兵器工場建設契約に合意したあと、七月一五日、ゼークトは香港から帰国の途に着いた。プロイは、当初はゼークトとともにドイツに帰国することになっていたが、予定を変更し、広州に残って、エツケルトとともに「広東プロジェクト」の事務を継続することとなった。帰国の船の中で、ゼークトの気分はふたたび陰々滅々たるものとなった。

ゼークトを悩ませた第一の問題は、中国中央政府と蔣介石政権と西南派の間での「二股政策」への呵責であった。七月一六日、ゼークトは旅行日記に次のように記している。「全体的に見れば、あらゆる事実は、予想ないし期待していたこととはまったく異なっていたという判断である。偉大な北京と楽しい上海のあとで、最後に広州への不快な旅が待っていたのは残念だった。しかしこれも私自身が責めを負うべきものである。広東に旅行したのは不都合であった。「二重の課題は不都合だ」。訪中前、ゼークトは明らかに中国中央政府と地方政権の関係を甘く見ていた。しかし実際中国に来てみて、蔣介石政権と西南派の対立が予想以上に厳しいという現実に加え、さらに広東派と広西派の間で保たれている微妙な権力関係にも思いを致さざるを得なかったのである。しかも南京で実際に蔣介石と会見した時の印象は強烈であった。ゼークトは蔣介石の好意に反する行動をとることについて、自責の念を持つに至ったのである。

ゼークトを悩ませていた第二の問題は、かつての忠誠なる部下ヴェッツェルとの葛藤であった。七月二八日、ゼークトは旅行日記に記している。「残念ながらヴェッツェルは私にはほとんど満足していない」。実際、ゼークトの帰

国後、ヴェッツェルは九月二八日、ドイツ公使館を通じ、ゼークトのヴェッツェル宛六月三〇日書簡をドイツ国防省の在華ドイツ軍事顧問団担当連絡官プリンクマンに送り、その際、「この男が中国でいかに私に困難をもたらしたか」(強調原文)を告発していた。⁽¹⁰⁾ ヴェッツェルの中でゼークトは「閣下」から「この男」へと転落した。ゼークトの書簡は、ヴェッツェルの怒りに火を放ったのである。

さらに一〇月一三日にもヴェッツェルはプリンクマンに手紙を送り、つぎのように痛憤していた。「この男に、かくも興味深い旅行と『それ以上』のこゝとを与えてやったのは、私だ。しかしこの男は一四日間のおしゃべり旅行において、ホテルの窓から、あるいは私の家のきれいに飾ったバルコニーから、中国の現状を把握し得たと思つてゐるのだ。しかも私に知らせることなく覚書を蔣介石に渡したのだ。こんなことがどうして戦友精神と結びつか、私にはまったく理解することができない」⁽¹¹⁾。

ゼークトを悩ませていた第三の問題は、妻ドロテアの金銭問題であった。広州滞在中の七月一三日、ゼークトは旅行日記に記している。「またしても銀行から金を引き出すらしい。どの手紙の中にも不平以外の内容なし。堪忍袋の緒が切れる寸前だ」。さらに中国からヨーロッパへ向かう船の中でも、七月三日、ゼークトはドロテアに電報を打ち、「金の使い方には気をつけろ」と注意している。三日後の二六日にもゼークトは日記に記している。「金に関する注意 (Geldmahnung)」。ゼークトが中国で、老駁に鞭を打ち、良心の呵責に耐えながら蔣介石政権や西南派から稼いださまざまな報酬は、こうして、ドロテアによって、右から左へと浪費されていったのである。

しかしそれでもゼークトは、次のような呼びかけで、健気にドロテア宛のはがきを出し続けるのであった。「私の可愛い子猫！ (Lieber kleiner Katz)」。ゼークトの心の間は、暗く深かったと言えよう。

一九三三年八月八日、ゼークトを乗せた船は静かにマルセイユの港に到着した。

おわりに ゼークト再訪中問題の浮上

蔣介石は、ヴェッツェルを更送するためにゼークトの面接を行い、当初の計画どおり彼をヴェッツェルの後任に据える決意を固めた。蔣介石およびその指示を受けた朱家驊の催促は矢継ぎ早であった。ゼークト帰国後の九月二十九日、朱家驊はゼークトに電報を送り、「ヴェッツェルに関して状況は耐え難く先鋭化」しており、「蔣介石司令官はあなたに再会したいという衷心の希望を私に伝えた」とゼークトの中国再訪を要請したのである。⁽¹⁰⁸⁾翌九月三十日、朱家驊はゼークトに懇切な書簡を認め、前日の電報には記せなかった事情を語った。「ヴェッツェル將軍と蔣介石司令官との間に存在する緊張関係はこの間さらに悪化してしまった。私は両者の間に存在する険悪な感情を除去するため仲裁を試みたが、成功しなかった。ここに至っては、もはやこれ以上の仲介は無意味である」。蔣介石は、朱家驊經由で、ゼークトに次のように要請した。「いままでヴェッツェル將軍が果たしていた職務をあなたが果たして欲しい」。⁽¹⁰⁹⁾蔣介石は、ヴェッツェルに代わり、第四代在華ドイツ軍事顧問団長に就任するため、再訪中するようゼークトに正式に要請したのである。

こうした蔣介石政権の強い要請が引き起すゼークトの再訪中問題と、それに密接に絡んだハンス・クラインのさらなる暗躍は、ドイツ「第三帝国」内部、中国国内政治およびその後の独中関係に深刻な波紋を呼び起こすことになる。しかし、その詳細については、残念ながら別稿に譲らなければならない。

- (1) 田嶋信雄『ナチズム外交と「満洲国」』一九九二年、東京・千倉書房、第一部「ナチズム期ドイツ外交の分析枠組」三—一〇画を参照されたい。
- (2) Friedrich von Rabenau, *Seeckt, Aus seinem Leben 1918-1936*, Leipzig: Hase & Koehler Verlag 1940.
- (3) Ependa, S. 677, Anm. 1.
- (4) Hans Meier-Welcker, *Seeckt*, Frankfurt a. M.: Bernard & Graebe Verlag für Wehrwesen, 1967.
- (5) Karl Mehner, Die Rolle deutscher Militärberater als Interessensvertreter des deutschen Militarismus und Imperialismus in China 1928-1936, Unveröffentlichte Dissertation, Universität Leibzig 1961.
- (6) Jerry Bernard Septs, German Military Advisers and Chang Kai-shek, 1927-1938, Ph. D. Dissertation, University of California at Berkeley 1972.
- (7) Bernd Martin (Hrsg.), *Die deutsche Botschaft in China. Militär-Wirtschaft-Außenpolitik*, Düsseldorf: Droste 1981.
- (8) Walter Echert, *HAPRO in China. Ein Bericht über Entstehung und Entwicklung des deutsch-chinesischen Austauschvertrages 1930-1937*, o. O., o. D. 筆者(田嶋)は、在華ドイツ軍事顧問団事務所に勤務しておられたインゲボルク・クラーク女史(Frl. Ingeborg Krag)から一九九二年に本文書のコピーを頂いた。クラーク女史(当時フライブルク在住)に謝意を表した。
- (9) 馬振特・戚如高『蔣介石与希特勒 民国时期的中德關係』台北・東大圖書公司 一九九八年、一八三—一九九頁。
- (10) Nachlaß Seeckt, in: Bundesarchiv-Militärarchiv Freiburg (folgend zitiert als BA-MA), N. 247.
- (11) Sammlung „Deutsche Botschaft in China“, in: BA-MA, Msq. 160.
- (12) Nachlaß Max Bauer, in: BA-MA, N. 41.
- (13) Nachlaß Alexander von Falkenhausen, in: BA-MA, N. 246.
- (14) 在華ドイツ軍事顧問団のドイツ人メンバーの文書が複製されている。Politisches Archiv des Auswärtigen Amtes (folgend zitiert als PAAA), Pol. 13, China, Militärangelegenheiten 1-9, R85698-R85705.
- (15) Bundesarchiv Lichterfelde (folgend zitiert als BA-L), R9208, 在華ドイツ軍事顧問団のドイツ人メンバーの文書が複製されている。R9208のドイツ人の2241から2250 (Deutsche militärische Berater bei der chinesischen Nationalregierung) がコピー複製されている。
- (16) 中央研究院近代史研究所史料叢刊『德国外交檔案 一九二八—一九三八年之中德關係』台北・中央研究院近代史研究所

- 所 一九九一年。中国第二歴史档案館(編)『中徳外交密档 一九二七 一九四七』桂林・広西師範大学出版社 一九九四年。Mechthild Leutner (Hrsg.), *Quellen zur Geschichte der deutsch-chinesischen Beziehungen 1897 bis 1995*, Berlin: Akademie-Verlag 1997.
- (17) *Biographisches Wörterbuch zur deutschen Geschichte*, Dritter Band, S.-Z., München: A. Francke Verlag 1975, S. 2614-2616. ゼークトの生涯については Rabenau, Seekt; Meier-Welcker, Seekt を参考にした。和文では 以下の論文がゼークトの政治的・軍事的活動の特定の側面を扱っている。山口定「グレーナー路線とゼークト路線」立命館大学『人文科学研究所紀要』第六号、一九六二年五月、七三 一四三頁。また、ドイツ軍部に関する以下の著書・翻訳でもゼークトに関する言及は多い。室潔『ドイツ軍部の政治史 一九一四 一九三三』東京・早稲田大学出版部 一九八九年。ウィーラー・ベネット、山口定訳『国防軍とヒトラー 一九一八 一九四五』東京・みすず書房(新版)二〇〇二年。ヴァルター・ゲルリッツ、守屋純訳『ドイツ参謀本部興亡史』東京・学習研究社 一九九八年。ただし、これらの和文献ではゼークトの中国訪問についてはほとんど(あるいはまったく)触れられていない。
- (18) 陳紅民(光田剛訳)「矛盾の連合体 胡漢民・西南政權と広東実力派(一九三二 一九三六年)」、松浦正孝編著、昭和・アジア主義の実像』京都・ミネルヴァ書房 二〇〇七年、七八頁。
- (19) 姜珍亜「一九三〇年代陳済棠政權の製糖業建設」『近きに在りて』第三〇号、一九九六年一月。
- (20) 施家順『両広事变之研究』高雄・復文圖書出版社 一九九二年、三三一 三三三頁。
- (21) 『李宗仁回憶録』下、上海・華東師範大学出版社 一九九五年、四七六頁。施家順『両広事变之研究』二九 三〇頁。なお、中央研究院近代史研究所口述歴史叢書(4)『白崇禧先生訪問紀錄』台北・中央研究院近代史研究所 一九八四年、にはこのころの記述がほとんど存在しない。広西の近代化政策全般について、朱泓源『從変乱到軍省 広西の初期現代化 一八六〇 一九三七』台北・中央研究院近代史研究所 一九九五年、参照。
- (22) 陳紅民前掲論文参照。
- (23) 施家順『両広事变之研究』三五頁。羅敏(光田剛訳)「福建事变前後の西南と中央 対立から交渉へ」松浦正孝前掲編著『昭和・アジア主義の実像』所収。
- (24) 羅敏前掲論文一七七頁。
- (25) 『李宗仁回憶録』上、下。施家順『両広事变之研究』。蘆溝橋事件勃発後の広西について、参照。ダイアナ・ラリー「戦

- 争の地域へのインパクト 広西、一九三七年 一九四五年」 姫田光義・山田辰雄編『中国の地域政権と日本の統治』東京・慶應大学出版会 二〇〇六年。
- (26) 日本語では、データは旧いが、差しあたり鹿毛達雄「独ソ軍事協力関係（一九一九 一九三三）」、『史学雑誌』第七四編第六号（一九六五年）一四二頁を参照されたい。
- (27) Schussler, „Der Kampf der deutschen Marine gegen Versailles 1919-1935“, bearbeitet von Kapitän zur See Schussler, Berlin 1937, Nürnberger Dokument 156-C, in: *Der Prozeß gegen die Hauptkriegsverbrecher vor dem Internationalen Militärgerichtshof Nürnberg*, Nürnberg (s. n.) 1948, Bd. 34, S. 530-607; Berthold J. Sander-Nagashina, *Die deutsch-japanischen Marinebeziehungen 1919 bis 1942*, Hamburg: Universität Hamburg 1998; John W. Chapman, “Japan and German Naval Policy 1919-1945”, in: Josef Kreier (Hrsg.), *Deutschland-Japan. Historische Kontakte*, Bonn: Bouvier Verlag Herbert Grundmann 1984; HHK ヲキコメント昭和取材班編『オレンジ作戦』東京・角川書店 一九八六年 とくに「日独合作伊号潜水艦」一八六 一〇六頁。
- (28) „Schlußwort des Berichtes der China-Studienkommission des Reichsverbandes der Deutschen Industrie vom November 1930“, in: Bernd Martin, *Die deutsche Beraterchaft in China*, Dokument Nr. 6, S. 362-378.
- (29) 参照: 田嶋信雄「孫文の『中独三国連合』構想と日本 一九一七 一九二四年 『連ソ』路線および『大アジア主義』再考」服部龍二・後藤春美・土田哲夫(編)『戦間期の東アジア国際政治』東京・中央大学出版会 二〇〇七年、二二五―二四頁。
- (30) Memorandum des chinesischen Aufbauaministers Sun Ke vom 8. Juni 1928, in: Bernd Martin (Hrsg.), *Deutsch-chinesische Beziehungen 1928-1937*, Berlin: Akademie Verlag 2003, Dok. Nr. 1, S. 65-66; William C. Kirby, *Germany and Republican China*, Stanford: Stanford University Press 1984, pp. 63-64.
- (31) Kirby, *Germany and Republican China*, pp.53-54.
- (32) Brief des Majors Mayer-Mader an den Stabschef des SS Röhm mit Bericht seines Sohnes, des Hptm. a. D. Andreas Mayer-Mader betr. Waffenherstellung in China unter deutscher Regie (Provinz Kwansi 1933) vom 20. März 1933, in: BA-MA, MsG. 160/11.
- (33) Ebenda. この時マイヤー＝マダーがいかなる計画を有し、中国のいかなる勢力を代表し、ゼークト以外のいかなる

相手と交渉していたかは、残念ながら必ずしも明らかではない。

- (34) Ebenda. 中国国民党中央委員会党史委員会編『馬君武先生文集』台北・中央文物供給社 一九八四年、には、兵器工場建設に係わるドイツとの接触についてはほとんど書かれていない。
- (35) Mayer-Mader an Röhm vom 20. März 1933, a. a. O.
- (36) Ebenda: Echert, *HAPRO in China*, S. 11.
- (37) クラインの経歴に関しては、一九三三年一月十七日のドイツ外務省による調査報告を参照のこと。Aufzeichnung des Legationstrates Altenburg vom 27. November 1933, in: *ADAP*, Serie C, Bd. II, Dok. Nr. 89, S. 151-152.
- (38) Mayer-Mader an Röhm vom 20. März 1933, a. a. O.
- (39) Ebenda.
- (40) Ebenda.
- (41) Der Chef des Stabes, Heereswaffenamt, Oberstleutnant Thomas an das Auswärtige Amt (folgend zitiert als AA) vom 13. Januar 1933, in: PAAA, Ostasien, Allgemeines, Aug. 1932-Mai 1936, Mikrofilm 6691/H098120.
- (42) Mayer-Mader an Röhm vom 20. März 1933, a. a. O. 外交政策過程におけるマクスターが自らの行動を「国益」のためであると主張するイデオロギー的傾向について、参照：田嶋信雄前掲『ナチズム外交と「満洲国」』一〇一頁。
- (43) Mayer-Mader an Röhm vom 20. März 1933, a. a. O.
- (44) Ebenda.
- (45) Ebenda. 外交政策過程におけるマクスターのモチベーションとしての「個人的利益」について、参照：田嶋信雄前掲『ナチズム外交と「満洲国」』九六、九七頁。
- (46) Mayer-Mader an Röhm vom 20. März 1933, a. a. O.
- (47) Ebenda.
- (48) Das AA an die Reichskanzlei vom 16. November 1933, in: PAAA, R85703, 64018. ただし、手紙は内閣官房には届けられなかった。Der Staatssekretär in der Reichskanzlei an das AA vom 20. November 1933, ebenda.
一九三三年一月三〇日にナチスが権力を掌握すると、極東政策をめぐり、マイアー＝マードーのように、多くの政治的・経済的投機分子がナチス権力にすり寄る現象が見られた。対「満洲国」政策におけるフェルディナンド・ハイエ

- (Fernand Hays) 対日政策をめぐるフリードリヒ・ハック (Friedrich Haek) などが典型である。ハイエについて参照。田嶋信雄前掲『ナチズム外交と「満洲国」』、ハックについて、大木毅「フリードリヒ・ハックと日本海軍」、『國際政治』第一〇九号(一九九五年)、田嶋信雄『ナチズム極東戦略』東京・講談社 一九九七年。
- (49) Mayer-Mader an Röhm vom 20. März 1933, a.a.O.
- (50) Ebenda.
- (51) 田嶋信雄前掲「孫文の『中独三國連合』構想と日本」一七頁参照。
- (52) Das AA an die Reichskanzlei vom 5. Dezember 1931, in: BA-L, R43 I 57/S. 25.
- (53) Weizell an Seeckt vom 14. März 1932, in: BA-MA, N 247/133, Bl. 3-4.
- (54) ハインリッヒ・シュネー『満洲国』見聞記』東京・新人物往来社 一九八八年、参照。
- (55) 王聿均・孫斌合編『朱家驊先生言論集』中央研究院近代史研究所史料叢刊(三)ノ台北・中央研究院近代史研究所 一九七七年。ではこの時期のドイツとの接触についてほとんど触れられていない。
- (56) 蔣介石致劉文島電 一九三三年五月一日、蔣介石檔案 叢筆一ノ〇五二〇四、國史館。
- (57) 蔣介石致朱家驊簡 一九三三年七月三日、蔣介石檔案 叢筆一ノ〇五三九一、國史館。
- (58) Micheisen an den Gesandten in Peking Trautmann vom 11. April 1933, in: ADAP, Serie C, Bd. I, Dok. Nr. 156, S. 287.
- (59) Weizell an Seeckt vom 29. Mai 1932, in: BA-MA, N 247/133.
- (60) Weizell an Seeckt vom 3. August 1932, in: BA-MA, N 247/133.
- (61) Aufzeichnung von Bülow vom 8. November 1933, in: ADAP, Serie C, Bd. II, Dok. Nr. 48, S. 82-84.
- (62) Trautmann an das AA vom 30. Dezember 1933, in: ADAP, Serie C, Bd. II, Dok. Nr. 157, S. 284-286.
- (63) 蔣介石致朱家驊簡 一九三三年七月三日、蔣介石檔案 叢筆一ノ〇五三九一、國史館。
- (64) 蔣介石致朱孔陽(部長) 一九三三年一〇月十五日、蔣介石檔案 叢筆一ノ〇五六一一、國史館。
- (65) Aufzeichnung Völkers vom 3. April 1933, in: PAAA, Mikrofilm AA/8985/E630037.
- (66) 田嶋信雄前掲「孫文の『中独三國連合』構想と日本」二〇一三三頁参照。
- (67) 北京師範大学・上海市檔案館編『蔣作賓日記』南京・江蘇古籍出版社 一九九〇年 一五一—一五三頁 一九三〇年三月一日条。

- (98) Ebenda. 王正華編註『蔣中正總統檔案・事務稿本』第110巻、新店・国史館、11005年、311-315頁、一九三三年五月二十八日抄。
- (97) Trautmann an das AA vom 26. August 1933, a. a. O.; Meyer-Welcker, *Seeckt*, S. 652.
- (98) Dr. Chu Chia Hua an Seeckt vom 4. Juni 1933, in: BA-MA, N. 247/133, Bl. 13-14.
- (99) 蔣介石（南園行宮）致何応欽電、一九三三年六月十五日、蔣介石檔案、籌筆1、六四七一、国史館。
- (90) Meier-Welcker, *Seeckt*, S. 653.
- (91) Ebenda.
- (92) Trautmann an das AA vom 26. August 1933, a. a. O.
- (93) Meier-Welcker, *Seeckt*, S. 653-654.
- (94) Tagebucheintragung Seeckts vom 16. Juli 1933, in: BA-BA, N. 247/135; Rabenau, *Seeckt*, S. 687; Meier-Welcker, *Seeckt*, S. 658.
- (95) „Denkschrift Seeckt zur Reorganisation der chinesischen Armee vom Juni 1933 für Chang Kai-shek“, in: Bernd Martin (Hrsg.), *Die deutsche Beraterstaffel in China*, Dokument Nr. 11, S. 383-394. 11の文書の註（三九二頁）に記載されたマルティン教授の考証によれば、ゼークトは六月十一日に覚書を書き終え、七月四日に朱家驊に渡し、蔣介石に提出するものに依頼している。
- (96) Ebenda. トラウトマンの公使による覚書がある。Trautmann an das AA vom 26. August 1933, in: ADAP, Serie C, Bd. 1, Dok. Nr. 412, S. 764-767.
- (97) Seeckt an Wetzell vom 30. Juni 1933, in: BA-BA, Msg 160/4, Bl. 13-21.
- (98) Ebenda.
- (99) Ulrich von Busekist, „Erinnerungen an meine Chinajahre“（私家版）はブーゼキストによる弁明の文書であるが、無批判には信用できない。筆者はヤンケボルク・クラーク女史（註8参照）所蔵の本文書をコピーをせて頂いた。
- (100) Ebenda. 11の11は、ウェッセルと朱家驊の関係が良好でなかったことを示唆しているとも考えられらる。
- (101) Ebenda.
- (102) Eckert, *HAPRO in China*, S. 14; Deutsches Generalkonsulat Canton an das AA vom 19. Juli 1933, in: PAAA, R85703.

E601891-92.

- (103) 「克蘭与西公当局簽訂之《中德交換貨品合約》」(一九三三年七月二〇日)、中国第二歴史档案館編『中德外交密档』(一九二七—一九四七)、桂林・広西師範大学出版社 一九九四年、四六〇—四六五頁。なお、広西派が独自に進めていた軍事工場建設計画について交渉するため、三三年七月一日にクラインが南寧に到着したが、「クライン氏がかつての立場に固執したため」、広西派との建設計画合意には至らなかった。A. Mayer Mader an Hitler vom 3. September 1933, in: PAAA, R85703. 広西派はクラインを通じて独自の軍事工場建設をすすめる計画をむしろ断念し、「西南派」として広東プロジェクトに加わったものと思われる。
- (104) 鄧演存「琶江兵工廠建立始末」、広州市政協文史資料研究委員会編『南天歲月—陳濟棠主粵時期見聞実録』(広州文史資料第三七輯)、広州・広東人民出版社 一九八七年、一六一—一六七頁。鄧演存は当時琶江兵工廠建設事務所主任として工場建設の事務処理にあたった。また、李涵・陸洪洲編『中国兵工企業史』北京・兵器工業出版社 二〇〇三年、一五二—一五四頁、をも参照のしよ。
- (105) Trautmann an das AA vom 18. September 1933, in: ADAP, Serie C, Bd. I, Dok. Nr. 436, S. 801-803.
- (106) Wetzell an Brinckmann vom 28. September 1933, in: BA-MA, MsG. 160/4, Bl. 90-95.
- (107) Wetzell an Brinckmann vom 13. Oktober 1933, in: BA-MA, MsG. 160/4, Bl. 79-80.
- (108) Telegramm des Herren Minister Chu Chia Hua vom 29. September 1933 aus Shanghai, BA-MA, N247/133, Bl. 30.
- (109) Chu Chia Hua an Seeckt vom 30. September 1933, in: BA-MA, N247/133, Bl. 31-32.

(たじま・のぶお = 本学教授)